

「Practical Fiberoptic Esophagoscopy」

熊谷義也・幕内博康 共著
J. Patric Barron 英訳

東京医科歯科大学教授
遠 藤 光 夫

食道癌の早期診断に内視鏡検査が不可欠であることは言うまでもない。しかし、粘膜癌、特に上皮内癌の診断や微小癌の診断が、ただファイバースコープを挿入したからといって、無条件で探知できるものでもなし、多少の熟練も必要であるし、観察上のコツも必要になってくる。

本書は食道ファイバースコープ検査の実際について、要領よく簡潔にしかも読みやすくまとめている。したがって内視鏡検査の教科書というより、いつでも必要によりパラパラと頁を開いて拾い読みできるというハンドブック的気やすさを持てるものである。これは1つに著者らの実力によるもので、著者らは、現在のこの分野では第1人者であり、しかも現役のバリバリであって、その豊富な自分の経験で書かれたものであ

るからであろう。

本書は3部から構成されている。まず器械の操作法で、挿入法、記録、生検、更に色素法と、ルーチンでの検査方法が要領よくまとめられている。次は症例で、これは定評のあるきれいな内視鏡写真で、本当に珍しいものから食道の粘膜癌まで食道の全部の疾患を収めたと思われるくらいで、それも各症例が、2~4頁の簡単な説明と共にまとめられていて、図譜として眺めていても楽しいが、実際の検査の場で、確認することも容易である。最後に、現在大きく伸びつつあるファイバースコープでの治療面についても触れている。これは著者らが得意とするもので、かつて「食道の治療内視鏡検査」のシネにより欧州内視鏡学会で受賞されたことは記憶に新しい。異

物の摘出、狭窄部の拡大、ポリペクトミー、静脈瘤の硬化療法について、そのポイントを述べている。

本書はこのような食道鏡検査の実際について、各項目が見開きの2~4頁で終わるようにまとめられていて大変読みやすく、しかもその内容は本当に本検査に習熟し、経験の豊富なものでなければ書けないようなコツについて触れているユニークなハンドブックである。これから食道鏡検査にタッチしようとする医師だけでなく、既にかなりの経験を積んだ医師にも、日常の臨床での座右の書として是非お薦めしたい書である。

なお、訳者のBarron氏は現在聖マリアンナ医大、東京医大に籍を置き、医学英語教育に大変熱心な方で、このような訳書は20編以上あり、医学界では広く知られた人である。日本語で日本人以上に読み書きもできるため、著者らの意図は十分に表現されている。

今後、若い先生方が国際学会で活躍する機会はどんどん増えてくるが、英語での表現を勉強するにも適した書である。

B5判 128頁 1987年 定価12,000円
送料400円 医学書院 刊